



長崎で被爆して70年



伊藤 元枝 (当時7歳)
石川 尚美 (当時5歳)
札幌市

長崎にて

▼長崎へ

伊藤 私は福岡で生まれました。長崎へきたのは、私たち子どもがまだ小さいからという両親の配慮ね。長崎には母の実家があったの。そこで私たちは母と5歳上の姉(次女)、2歳上の兄(長男)、私、2歳下の妹(石川尚美、4女)、それと叔母さん(父の弟のお嫁さん)、叔母さんの子どもの7人で暮らしていたんです。長女は被爆のとき勤労働員¹⁾で大分の方へ行っていたから、被爆してません。父は国の召集で家におらず、満州に行っていました。被爆直後に弟が生まれたの。

引越した先は大浦川上町63、山の上の方で、水源地が近くにありました。牛を飼っているところなんかも近かったね。ここで終戦を迎えたんです。山に住んでいても、自由に走って遊んだりはできなかつたんだけどね。子どもだったし、敵機がきますからね。

そこは爆心地からは5キロメートルほど離れたところだった。当時は小学校2年生だったかな。私は7歳でした。でも、学校なんかは行かない日の方が多かったね。敵機来襲するからって姉に手足掴まれてひれ伏して過ごしていて。そういう日は、学校は無しだったね。それで家に帰っていたんです。

1) 勤労働員

中等学校以上の生徒や学生が農村や工場などの労働力不足を補うため強制的に動員された制度。昭和13(1938)年の制定当初は学校の長期休暇中に3～5日間勤労奉仕することを義務付けるものであったが、原爆投下前の昭和20(1945)年4月からは1年の授業停止による学徒勤労総動員の体制をとった。

▼被爆の瞬間

伊藤 爆心地から5キロっていったら結構離れてるし、山もあったからね。山には防空壕²⁾がたっくさん掘られていて、敵機がよくくるからしょっちゅう押し込まれていたけど、この被爆のときだけは敵機来襲がないのよね、全然。だから私は防空壕から出てこられた。母が「元枝さん。ちょっと早いけど、お昼ご飯食べてから防空壕にお入り」と言ってくれたのね。それで姉と2人で「ごはん、ごはん！」と言って家に入ったら、なんか頭の上で飛行機の音がしたのよね。だから私は「あれはB29の音だ」と言ったんだけど、姉が「まあた。あんたのなんか当たりゃしないわ」なんて言うから、私も意地になってね。空の方を見てみたら、ばっちり飛行機があったわけ。それもB29³⁾だったの。日本の飛行機は下からみると青黒く見えて、アメリカの飛行機はピカピカだからね。見たらわかるのね。

「ああ、きてる！あれは絶対にアメリカのだ」と私が言ったら、それで姉も窓の方に来て2人で柱に囲まりながら覗いてみたの。そのとき、パアッとマッチを点けて消すくらいの一瞬の光が光ったの。それで急いで押入れがある奥の方へ向かったんだけど、もう襖もなく、畳もぼろぼろとめくれあがっていてね。家は土の壁だったんだけど、それもぼろぼろと落ちていった。それが原爆だったんだって気づいたのは、宮崎に行ってからだけね。

ここからはもう生きるための戦争だった。私と叔母さんはぐちゃぐち

2) 防空壕

空襲のときに避難するため、地中や丘の麓に造られた穴や構築物。応急の退避施設の役割を果たした。直撃されたり焼夷弾による都市爆撃の場合は安全性は保てなかった。

3) B29

第2次大戦中に開発が進められ昭和19(1944)年6月から戦闘に投入されたアメリカの大型爆撃機。5、6トンもの爆弾を乗せることができ、航続距離が長く飛行性能に優れていた。軍事施設のみならず都市に対する無差別爆撃を行って恐れられた。広島・長崎に原子爆弾を投下したのも同機である。

やになって引っかかっていた布団にうつ伏せて、姉は反対に玄関の方へ
 行って、上から落ちてきた物にぶつかってけがをできてしまっていたね。
 重症ではなかったから良かったけど。

関 係 年 表

	戦争と国内の動き	人々の暮らし
1931(S6)	柳条湖事件 (9/18)、満州事変へ	
1932(S7)	満州国建国 五・一五事件	満蒙開拓団送られる
1933(S8)	国際連盟脱退 滝川事件	
1934(S9)		子女の身売り、欠食児童続出
1935(S10)	天皇機関説事件	
1936(S11)	二・二六事件	
1937(S12)	盧溝橋事件 (7/7)、日中戦争へ	統制経済はじまる
1938(S13)	国家総動員法制定	食糧増産に学徒を動員
1939(S14)	第二次世界大戦始まる	米穀配給統制法 国民徴用令
1940(S15)	日独伊三国軍事同盟 大政翼賛会できる	砂糖・マッチ等の切符制実施 米穀の供出制実施
1941(S16)	真珠湾攻撃(12/8)、太平洋戦争へ	小学校は国民学校(皇国民の錬成)に 米穀切符制、軍事部門へも学徒を動員
1942(S17)	ミッドウェー海戦で敗北	本土初空襲、衣料総合切符制実施
1943(S18)	特別幹部候補生制度できる 学徒出陣始まる	
1944(S19)	サイパン陥落 徴兵年齢を満17歳に	建物疎開、学童疎開始まる 学徒の通年動員、女子も挺身隊に 本土空襲本格化
1945(S20)	ポツダム会談、ソ連参戦 玉音放送 (8/15)	東京大空襲 (3/10) 沖縄戦 (4～6) 広島 (8/6) 長崎 (8/9) へ原爆投下
1946(S21)	日本国憲法公布 (11/3)	

作成:小林華衣

光ったときは柱に掴まっていたし、庭の方にある柿の木の影がちょうど私の方にかかっていたから、光の被害をそこまで受けずに済んだんじゃないかな。ただ、柿の木の木漏れ日が当たっていた腕の部分は固くなっていて、何十年経ってもそのままだから皮膚科に行ったりもしてみたけど、原因はよくわからないと言われたね。なんともないよって言われたから、それでいいことにしてる。原爆が落ちた瞬間はそんな感じだったよ。熱いとも寒いとも感じられなかったね。そんな暇はなかった。とにかく光が怖かったね。

これだけ離れていても、爆風は本当にすごかったね。板を床に落としたときに埃が舞うような感じ。うちなんかはまだこれでもいい方だったよ。家のすぐそばには枇杷の木があったんだけど、それも全部すっぽ抜けてしまったくらいだからね。

その頃はまだ水は堀井戸の水を汲んで使っていたのね。外に出て井戸を見てみたら、爆風で飛んできた雑草や葉っぱがいっぱい入っていてね。井戸が使えるようになるまでにはだいぶ時間がかかったね。だから近くの牛を飼っているところに行って牛乳や水を分けてもらって過ごしていました。もう本当に、必死になっていたよ。家の人たちがみんなばたばたしていたね。私と妹は、「街に出たら駄目」って言われて、しばらくつけられるようにして閉じ込められていましたけど。

▼兄の被爆

伊藤 兄が帰宅したのは、原爆が落とされた日の午後4時くらいかな。当時9歳の兄は勤労働員っていうのに行っていたんです。汽車に石炭を入れなきゃいけないということで、駅の方へね。それでその時にピカドンがきてね。兄は帽子をかぶっていたけど、それ以外の顔や腕なんかの皮がもうべろっと剥がれていて。あと、兄は半袖に半ズボンも着ていたからその部分は無事だったけれど、膝の下がペロッとやられてね。あの頃はみんな服を脱いでることなんてよくあったからね。石炭を入れる作業をしていたし。そういう人たちは本当に大変だったんじゃないかな。兄は服を着ていたからこれぐらいで済んだと言っていたけれど、着るものもぼろぼろになって、身体の出ている部分はもうみんなケロイド状に

なっていたからね。あの当時は靴なんかもみんな草履ばかりだったし、草履だって自分で材料集めて編まなきゃ無かったから、兄は裸足で家まで帰ってきていたよ。

病院に行ったってそんなところ、もう座るところも休むところもないような状態だからね。兄が寄ってみたみたいだけど、入口まで人だらけだったから行ったって無駄だってことで行かなかった。母が兄につける薬をもらいに行ったこともあったけど、1日かかってももらえなくて、しょぼりして帰ってきたね。

そこからは、もう本当に大変だった。兄は皮膚が剥がれたまま寝たきりに近い状態で治るのを待つしかなかったんだけど、そうすると傷口にハエが寄ってくるのね。私はもうその寄ってくるハエを1日中追い払って、遊ぶのも我慢してた。本当にしんどかったよ。母が兄の傷口を洗ったりしていたけど、私の記憶の中では、火傷しているはずなのに血が滲んだりしていなかったね。ただ皮膚が剥がれているだけで。普通の火傷だったら、皮膚が爛れて血が滲んだりするものだけど、やっぱりこの火傷は普通の火傷とは違うからね。ただ鶏肉みたいに皮膚がべろんとしていたよ。

沸かしたお湯を冷ましたもので身体を拭いてやったり、熱を取るからってじゃがいもを一生懸命すったものを火傷したところに塗って何時間おきかに取り替えていたのね。本当に大変だった。薬も何もないし、医者なんかも山には来ないからね。

一番記憶に残っているのはね、この日の夕方の6時くらいだったかな。薄暗くなる寸前くらいの時間のとき、兄が一生懸命庭の方へ這って行ってね。何するんだろうと思って見ていたら、そこで嘔吐したんです。そこまで我慢してたんだね。その嘔吐物を見たとき、私びっくりしたんです。一体何を食べたらこんな色とりどりのものが出てくるんだろうって。色紙を切って束ねたものを5ミリくらいに切ったような、赤や、黄色や青とかの粉々しいものを吐き出してたの。食べる物にこんな色をしたものなんてないって思いましたよ。母は後から、この吐き出したことがよかったんだって言うてました。被爆したときの悪い空気を全部吐き出したからよかったんだって。とにかくあれを見たら、本当にびっくりするよ。

このことがあってから1ヶ月後くらいかな。この頃は兄もどうにか自分で座ったりハエを払ったりできるようになってきてたね。

▼弟のこと

伊藤 弟は被爆してから19日後くらいに生まれた子だったんだけど、胎内被爆していたのね。そのことに気がついたのは、取り上げてくれた産婆さんだったの。夏だったから蚊帳の中でお湯を鹽に入れて産湯をしたのね。産婆さんが生まれたばかりの弟をバスタオルに乗せて、一番最初にまず頭をなでたの。そしたらそのタオルに血が付いたのね。なでる度に血が付いていたよ。「これはおかしい」って母もびっくりして見ていたんだけど、一体どこから出ているんだろうって、調べてみたのね。そしたら、頭の一番上だったの。そこに傷があって、そこから血が出たのね。普通こんなことってありえないじゃない。それで役所に弟の出生届けを出しに行ったときに言われたんだろうね、胎内被爆だって。

頭の傷のところははげになっていたんだけど、普通のはげじゃなかったのね。普通はげで生まれてくるっていったら、その部分はすっかり毛が無い状態になるじゃない。だけど、弟のはげを大きくなってから気になって見てみると、小さいうずまきに毛がうっすらと生えてたの。こんなことって普通ないよね。そのときもそうだったけど、今もケロイド風に残っているね。お腹の中にもこんなことが起きるんだから、本当にびっくりするね。

▼アメリカ軍の進駐と父の復員

伊藤 原爆が落ちてからはもう、雨がひどかったね。黒だったか黄色だったか色はよく覚えていないけれど。でも、雨のせいで外へ出られなくて本当に嫌だったよ。道路なんか滝みたいに水が流れていてね。

今の人たちにはわからないかもしれないけど、この時は芋の茎やかぼちゃの種・茎、全部食べ物だった。食べられるものなら何だって集めてこなければならなかった。百姓のところへ分けてもらいに行行って食べていたね。水の一滴さえ本当に大切なものだった。

妹（石川尚美）は小さい頃から目が不自由で、弟が生まれるまでずっ

と母におぶさって過ごしていたんです。当時は食べるものも少なく、栄養もいき渡らないですからね。なので妹とは全然遊んだりできなくて。被爆したすぐあとに弟が生まれたので、その頃はもう妹は母の背から降りて過ごしていたんですけど、怖がって外には出たがらなかったね。私は興味深々だったから山から様子を見ていたの。学校以外は行かせてもらえないから街の方なんかは行ってないけど、山から人の動きはよく見れていたよ。

天皇陛下の終戦のお言葉があつてすぐの、1週間もしないくらいのときから長崎の港には赤十字のマークをつけた白い大きな船が入って来ていたね。私は山の上から、長崎港や長崎全体の様子が一望できたの。そうこうしている間にアメリカ兵が山にきて、私たちが住居の代わりにしている防空壕を一つ一つ点検して歩いて回るんですね。なんのためともわからないけれども。母は防空壕に入れっていうことを被爆する前からよく言っていたんですけど、反対に父は絶対に入るなって言っていて、ちょっと混乱したりもしましたね。父は穴が塞がれたら出られなくなるからっていう理由からそう言っていたみたいだけど。

アメリカ兵の人もやっぱり食べ物が一番大事だから、私の家のそばにあった牛乳屋さんにしょっちゅう寄っていましたね。牛乳と卵をもらいに行っていました。だから、私の家の前も一番よく通っていたんです。

アメリカ兵が家の中へ入ってきたこともあったよ。そのとき家には女の人しかなくてね。私と母と叔母さんと。みんな黙ってかたまっていたよ。そしたらその人が3分くらいかな、家の中をじーっと見て、靴のままドスドスッと上がっていったの。家の掛け軸の後ろには45センチくらいの長さの短剣が隠してあったんだけど、それが見えたんだろうね。見えないようにしまつてあったはずなのに。それをぱつと持って行ってあとは何にもしないで帰って行った。お金になるものはみんな持って行ってしまうからね。あとから母に「なんでアメリカ兵はあんなことをしていたの？」と聞いてみたら、「戦争に負けたからでしょ」と言っていたよ。この出来事があったときに、アメリカ人は靴のまま家に上るんだってことを覚えたね。

10月中旬頃に父が国の召集から帰ってきたけど、長崎にはアメリカ兵

がたくさんいたからね。「目に毒だ。こんなところにはいられない」って言って、自分が長崎に疎開することにしたのにすぐ出て行くことにして、宮崎の方へ行ったんです。これは父が帰って来て本当にすぐだったから、同じく10月中旬くらいかな。

▼原爆投下前の日々

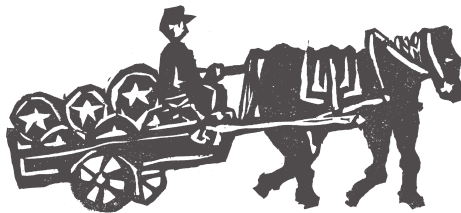
伊藤 私の家や周りの人もみんな戦争には反対だったよ。みんな当時の状況下で我慢していたの。男の人なんかは、弱音も一切吐かなかった。本当にかわいそうだったよ。4、5歳の子どもでもそうだったんだから。戦争に反対だなんて言えなかったし、日本が勝つんだって言わないと白い目で見られたりするの。でも、母はずっと泣かないでいてね。すごかったよ。本当に、この一連の戦争のことについて思わない日は無いね。

当時はラジオや時計がある家が少なかったんだけど、私の家にはラジオがあったのね。それでみんな聴きにきたりするもんだから、母は家から出られなかったね、ずっと。

父は戦争に行っていたから、帰ってきたときには面会があるのね。面会は山を越えた遠い場所でやっていたから、そこまで行っていたの。とても大変で辛かったね。妹は目が悪かったから母におぶさって行っただけど、私は歩いて行かなきゃならないのね。あの時はバスなんて無いし、汽車も遠いところにしか無いから、歩いて行くしかないの。でも、面会は本当に最高だったよ。なんでかっていったら、兵隊さんたちはみんなお兄さんばかりでしょ。お兄さんたちは自分たちがもらった大事なおやつとかを私のポケットに入れてくれたりしてね。母と父の面会の時間が終わるまでずっと抱っこしてくれていたよ。変な自慢話とかを聞いて楽しんでいたね。それくらい、兵隊さんたちも普通の幸せを求めていたんだよね。本当に喜んで抱っこしてくれていたよ。面会に行くまでは本当に辛かったけど、行った先でいいことがあるからそれでがんばっていたね。

学校に行った時なんかは、当時は背の大きい人から順に並ぶから、ちっちゃかった私は後ろの方だったのね。敵機来襲でサイレンが鳴った時は、学校のみんなで山の方の防空壕まで行かなきゃならなかったんだね。

ど、山に近い側に並んでいても、私は小さいから一生懸命走ってもなかなか他の人たちに追いつけないのね。そしたら、私よりも後ろにいた背の高いお兄さんたちが私や他の小さい子たちを抱っこして走って行ってくれたの。抱っこされていたら、進んでいる方と逆の景色が見えるでしょ。そのときに運動場の方に爆弾が四方八方から落とされているのを見たね。ぼこぼこ埃をたてて落ちていっていたよ。それくらい、たくさん弾を落とすんだよ。防空壕の中にいたって、その中にアメリカの飛行機の影も入ってくるの。かなり低空で飛んでいるからなんだよ。アメリカは日本のことなんてなんとも思っていなかっただろうね。私はそう思ったよ。



宮崎で農業を営む

▼宮崎へ引っ越す

伊藤 父はずっと福岡の八幡製鉄所に勤めていて、鉄砲つくる技術があったので召集されていたのね。さっき言ったけど、だいぶ落ち着いた10月中旬頃、父が帰ってきた。するとすぐに父はアメリカ人の顔を見るの嫌だということで、満州で知り合った戦友を頼って宮崎に引っ越しました。長崎に居たくないことを理由に引っ越しする父をみて、男は勝手なんだなってその時つくづく思ったね。

▼農業を始める

石川 私は長崎のこと、原爆のことは本当に記憶がないのね。小学校に入る少し前に宮崎の日南に移ったでしょ。その頃から少し覚えているくらい。小さな住まいをつくってそこに住んだんですね。

伊藤 宮崎に来てからは、生きるために持っているものを全部売って、食物に変えていましたね。そして農業を始めたでしょう、大変で、毎日泣いていました。夏はお米、やっぱり主にお米だよ。裏作は麦、畑はサツマイモと決まっているの。

石川 でもお米なんてほとんど供出⁴⁾。供出させられてほとんど無くなるんだ。強制的にね。

伊藤 与えられた田圃が2反くらいあっても、1反で1俵か2俵とれるくらいに痩せた土地しかないのに、どさっとくるから。

石川 少しずつ土地を借りて作ってたんですね。

伊藤 面積によってね、割り当てがくるの。出来高でくるならいいけど、我々みたいに後からはじめて、こんなところでできるのかっていうような人からも、生え抜きの人たちと同じにくるんだもの。だから戦争な

4) 供出

米麦、雑穀、いも類の主要食糧を政府が決めた価格で強制的に買い上げる制度。食糧管理制度のもとで戦時中から戦後の食糧不足時代にかけて行われた。

んて馬鹿くさくてやってられない。私たちはそこから逃げ出したいでしょうがなかった。

石川 よく親がね、リヤカーの引き方も知らないと言って近所の人に笑われているのがね、私たちの耳にも入ってたんですよ。

伊藤 私たち福岡にいても長崎にいても、そんなに貧乏したことないもの。父をうらみましたね。

▼被爆者だから……

石川 近くの家には大きなウチワサボテンの木があってね。兄はそれを頂いて、被爆して痛む箇所に塗りこんでいましたね。

伊藤 その兄がやがて結婚して長男が生まれたのね。その長男が小さい10か月くらいの時かな、今でいう難病みたいなかたちで亡くなっちゃったんです。それは被爆者だからだっという評判がたっちゃった……。変なところから出るんだよね、噂って。

石川 色眼鏡で見られて……。宮崎のほうは被爆ってということへの理解がないから、私たちは色眼鏡で見られた。

伊藤 とにかくあそこの人達は嫌い。

石川 本人たちにはそんなこと言えないから、子供たちにかえてきたのかなって。それはありますよね。

伊藤 頭に怪我した姉もその頃に傷は治りましたね。

石川 でも姉はね、甲状腺とか色々病気にかかりました。私も20年くらいは甲状腺をやってたんですけど。今は一応落ち着いているから薬とか使っていないです。

▼学校での生活

伊藤 そのころの父は厳しかったですね。朝4時半になると赤ちゃんもみんな起きるんだよ。起きて、お布団上げて、お掃除して、動物養うの。餌をとってきて食べさせてやらないと学校にも行かせてもらえない。本当にもたもたしていたら学校なんて行けなかった。

石川 ひどかったんですよ、父は。昔なんかね、寝ていると、顔洗った洗面器のお水を頭からかけられる。テーブルでもなんでもひっくり返す

んだから。

伊藤 学校どこで卒業したのかなあ。

石川 宮崎は小学校と中学校と一貫校みたいな感じだったんです、今でいえばね。同じ場所にあって。だから、私たちみたいに、家庭的に、経済的にゆとりのない人とか、身体障がい者の人はそこでストップしちゃう感じ。年齢的に上の人ともお勉強一緒にしましたしね。高等な学校には行っていません。ほとんど教育無し。でも、私の時期になったら高校を受験していた人が多かったですね。

伊藤 私たち、はっきり言って戦争中もその後も勉強なんてさせてもらえなかったよ。就職する人は、もう、百姓しなさいって。

私の1年生、2年生の頃は学校に行ったか行かないか分からない。だから本がなくてね。本のかわりに新聞紙1枚、今みたいに立派なのではないよ、それを姉さんに閉じてもらうの。姉さんにどれだけ助けてもらったか。何でもそう。こっちの学校からこっちの学校に行ったら教科書が違うでしょう。それはもう先生に言って友達の本を借りて姉さんに全部写してもらって……。靴だって材料集めて自分で作って……。だから、貧乏な人は新しい靴なんて買ってもらったら、走るときは脱いで抱えて走った。だって、配給⁵⁾だよ。1年に1回の。全員あたるんじゃないの。クラスで7足、それを何人かがくじ引きで。まあ、お金持ちの家はそれぞれ買うけどね。

今の方はそりゃあいいよ。私らみたいに鉛筆1本消しゴム1つない時代なんかより。そのなかで選べるんだもの。私たち選ぶところではないんだから。自分のところに紙が1枚くるかこないか、はらはらどきどきしながら。

石川 私なんか目が悪くて就職もできなくて、受験しても視力で落とさ

5) 配給

工業原料や燃料、生活物資等は戦時中消費量が制限された。砂糖・マッチの切符制、米穀の配給通帳制、衣料の切符制などが代表的なもの。「ぜいたくは敵だ」「欲しがりません勝つまでは」と言われ、国民は耐乏生活を強いられた。

れた。だから、兄弟の手助けが精一杯だった。いくらか役にたったのかなあって思うんだけど、どうだろう。

北海道〈札幌〉にきて

▼札幌へ

石川 私はちょこちょこお小遣いが貯まったから一人で旅行しに札幌へ来たの。それでそのまま居ついちゃった。でもそれは宮崎で被爆者だから周囲の目が気になってこっちへ来たとか、そういうのではなかったね。

伊藤 私は結婚してから、昭和40（1965）年に北海道へ来ました。でも私も妹とおんなじようなもんだね。妹のところへ手伝いも兼ねて遊びに言って……あれから50年経つなんて、早いねえ。

石川 でもその頃札幌は思ったより田舎だなあとと思うくらいガランとしていたよ。当時九州では、北海道って言ったら日高山脈とか、札幌、旭川って地図に載ってるくらいだったもの。

伊藤 札幌、旭川、稚内、それくらいしか知らなかったねえ。だって北海道に用がないんだもん。だんだん豊かになっていって、働くようになって、そして遊べるようになった。

▼貧血に悩まされ

伊藤 札幌に来てからは病院、いまでいえば介護の仕事についていました。なんか知らんけど、私小さいころから病院に縁があって。一番先に勤めた病院が、父の友達のやってる歯医者。そこの奥さんがちょっと体弱かったから、代わりに子守兼掃除兼炊事とやってたね……。そんな感じで、病院とはずっと縁があるんだわ。ほんと、最後まで。でも、人間仕事できるのが一番いい。

やっぱり働くのが一番いいよ。けど大変だった。原爆の影響かどうか知らないけれど、ともかく体がだるくてね。風邪ははやる前にひくし、流行が終わる頃にはまた2回くらいうつってしまうのね。お医者さんから始終薬をもらって飲んでた。でも、時間に束縛されるから、働いてるのが一番嫌かも知れない。体調が悪くなったとき周りの人に一言「いっ

時休まして」って声かけてから出るんだけど、やっぱりそう声かけてでるのって、いやだよねえ。

だけど自分の身体がいうこときかないのは悔しかったね。たとえば「今日は何ともない」と思っても、6時くらいになったら頭が割れそうになってね。「やー、どうしてもダメだわ」というようなことはしょっちゅうあった。私も仕事はやりたいのに、くやしいけどとにかく身体がいうこときかなくて。「根性なしと思われてるだろうなー」と歯噛みすることは始終あったね。パートなんていっても2時間か3時間働いて精一杯だったね。

私は子ども産んだときから貧血持ちで、子どもも貧血で亡くしてる。今も1年に1回は点滴しに病院へ行ってるね。今年も点滴に行ってきたよ。体の調子が悪いときは自分でわかるの。スーっと血が下がっていく感じでね、もう立っておれなくて。そしたら今度はゲーゲー吐きたくなくなってくるし。もう何年もこれを経験してるから、体調の変化が自然とわかる。だから自分で体調が悪そうになるとその先をみすえるの。だから今年も点滴行ってきた。

でもお医者さんにかかってCTで頭を検査しても、何ともないって言われるんだよね。そうはいっても私は頭はふらつくし嘔吐したくなるし……。だから、貧血になったら横になってるしかない。そして終いには「元気の出る点滴して」ってお医者さんに言うの。それをしてもらえば気分は良くなるしね。

まあそんなこんなでなんとかここまで生きてきた。

▼子どもへの不安

石川 そうね、お産の度に子どもが難病にかかってないか心配したね。元気かどうか、産むたびに心配だった。

伊藤 難病の子どもを持つって大変だよねえ。一生しょっていかなきゃならないから。

石川 結婚してからも、夫の実家からは被爆について言われたことありますね。でも、子どもが何ともなかったから平気な顔して威張ってられるんだけど。やっぱり不安ていうか、口汚く言われたこととか、被爆者

だからとか言われたりしたことがありますよ。

伊藤 やっぱり人間だから、人の弱みを言うよ。私そう思って聞いているね。

石川 でも事実だから、私はもう無口で通り過ぎてきたけどね。

▼被爆者手帳

伊藤 被爆者手帳⁶⁾は札幌に来てからもらったの。一番上のお姉さんが、「あんたらはいま（被爆者手帳を）取っとかないとならないよ。長崎の証人がいなくなったら取れないよ」って教えてくれて。だから、ああそうなのかなあって思ってね。あれって作るのに証人がいるんですね。長崎には親戚がなんぼかいるんだけど、私たち違うところに行ったから親戚の顔見たことないし、わかんないから、姉に頼んで証人を書いてもらって……、昭和50（1975）年頃だったかしら。妹はまたその少しあと。私がすすめたの。取っとかないとって言って。

お医者さんには、やっぱり手帳見せると警戒する先生もいました。私が「普通の人と違うから」と言うと、しかたないから診てくれる。何か責任を負いたくないみたいな……、何も言われなかったけど。だから被爆者手帳もらっても5年くらい使わなかったね。あんまりにも頭が痛くなったから、それからは使ってるけど。

▼高度経済成長のころ

石川 そういえば昭和40（1965）年頃は名寄にいたね。私が札幌に出てきたのは50（1975）年くらいです。ちょうど高度成長の時期、私は通勤

6) 被爆者手帳

原爆医療法（1957）から原爆特別措置法（1968）を経て平成6（1994）年に被爆者援護法が制定された。原爆投下時に広島、長崎両市と隣接区域で直接被爆した人、投下から2週間以内に爆心地から約2キロ以内に入った人、被爆者の胎児だった人などが被爆者とされ、被爆者（健康）手帳が交付される。指定の医療機関で手帳を提示すると健康保険の自己負担分なしで受診や入院ができるほか、条件によっては諸手当が支給される。所持者数は183,519人（平成27年3月末現在）。

のバスに乗りながら、この豊かな生活があと何年続くんだろうって、それが心配だった。これからどんなことになるのかなあって。でも、今まで豊かに過ごしていますよね、すごいなあって思います。日本人ってほんと強いんだわ、頑張ってる。ほんとに、高度成長期といったらすごかったよね。でも当時の不安は成長期が終わった現在も続いているって感じだよ。

伊藤 そうだねえ……。

石川 でも70年も前の小さい頃のことっていうのは、やっぱり段々と忘れますよね。かいつまんでしか覚えきれないし。私たちなんか教育がないからなおさら。最近はやんちゃをとることすらないから。

いま、伝えたいこと

▼戦争について

伊藤 いやあほんつとに、戦争だけはしないでね。一番大変よ、耐えきれないよ。それに男の人たちの倍、女は大変。私も、母もそうだった。

石川 でもいま⁷⁾もまたね、大変ですね、曲がり角で。

伊藤 うーん……。

石川 でもひとりひとり頑張るしかないですね。

伊藤 早いねえ、70年……。あっという間だよ、過ぎてしまえば。羨ましいわ、おたくらが（イン



伊藤さん(左)と石川さん(右)

7) いま

平成27(2015)年夏、安倍内閣が強行しようとしていた日米安全保障条約関連法案に反対するデモが多発。7月16日に衆議院、9月19日に参議院で可決成立した。

タビュウしている女子大生に向けて)。

私は19歳か20歳のころには既に社会に出た。そのころはまだね、食事制限があまりなくて。朝はご飯1杯必要ね、それとお味噌汁。お昼はおうどん。それで12時間働くんだよ、それが普通だった。それから何年たってかなあ、労働運動というもんが盛んになってきてね。そう組合ができて初めてお給料が人並みになって、まあまあ3,000円だったのが倍になった。それで組合っていいもんだなって思ったね。そこまでしてくれて、組合できたと思ったら今みんなないんでしょ。当時の社会党⁸⁾がどれだけ頑張ったか。

変なことというけど、私たちなんか活動するときは田舎にまわるんだよ、警官があとつけてくるからね。怖いよ、運動に深入りしちゃいけないと思ったもの、あんまりすると目をつけられるから。でも会社に入ったら嫌でも労働組合に入るでしょ。それで活動じゃないときはただ会社の寮にいて、お仕事と、まあたまに週に2回くらいかな、会社で代金を負担してくれる習い事へ行ったりして。でも会社って悪くはないんだよ、ほんと、我々貧乏人にとってはね。そこで親にしてもらえなかった教養っていうか、お茶にお花にね、昔の習い事をみんな身につけた。自分でね。いまの人みたいに手取り足取り洋服から何からそんなにしてもらうことは、まずなかったね。

石川 いや、それはやっぱ平和だからよ。大切にしなきゃならないね。
伊藤 ほんとに平和よ。だから、いまの平和を忘れないで。

▼歴史をまっすぐ見てほしい

伊藤 いまの日本は、中国や朝鮮が言うように歴史をまっすぐみていないね。日本はみーんな隠すんだもんねえ。戦争中だって、負けてるくせに「日本勝ってる、日本勝ってる」って、日の丸揚げて町内流して歩く

8) 社会党

日本社会党のこと。総評（日本労働組合総評議会、後に日本労働組合総連合会に合流）の支持政党であり当時の社会労働運動をリードした。現在は社会民主党と党名を改めている。

んだよ。うちの母さんは列に加わるのはいやだっていうんだけど、隣のおばさんは行こう行こうって、面白いからついて行こうって言うのね。政治家って都合の悪い時はしょっちゅうウソばかり言うんだよ。子どもながらにそう思ってたよ。だってうちのお父さんは、帰ってきてもそんなこと言わなかったよ。父自身が、日本が勝つなんて言ってことないのに、よその人は「勝つ、勝つ」って言うの。当時は勝つって言わないと白い目で見られたから。

私に言わせると、戦争って政治家が勝手に始めるんだもんね。やっぱり政治家は勉強してないよねえ。私も、そんなにいっぱい新聞読むわけじゃないけど。いま、北海道新聞にロシアとの交渉についての記事がずーっと載ってますよね。あれってすごくいい勉強になるよね。私なんか情勢あんまり知らなかったもんだから、樺太とか択捉ってこうなってるんだなって、見てるだけで勉強になる。

石川 北海道は特にロシアに近いからね。

伊藤 私たちは勉強こそ満足にはできなかったけど、子どもを殺しはしないよ。あれは悲しいね。子どもが殺されるのが一番もったいない。

▼若い人達へ

伊藤 私たちだけじゃないでしょう、被爆してる人たちって。それに被爆だけじゃない。毎日毎日世界中でなんかかんかやってるから。無くなればいいなあ、ってそう思うだけ。本当に怖いよ、戦争だけはしないほうがいい。

今の方はそりゃあいいよ。希望が持てるだけ幸せよ。その日その日、自分で切り開けるだけでも幸せだと思わなきゃ駄目。私のときなんか希望どころか足元もなかったんだから。

世の中の気になることと云ったら、みんな我儘だねえって言いたくなるときがある。でも新聞の読者の欄とか見ると、ああやっぱり私とおんなじ考えの人がいるんだって、とって救われますよ。あなたの考えに賛同するわって、書きたいくらいなもの。人間滅多に会えない上に、あまり体も動かないしね。

人間って、こうやって平和になって豊かになったら忘れるのが普通で

しょ、忘れなきゃ生きていけない。私は率直に言っちゃいますけど、忘れたいですよ。でも生きてるうちは、当時のことを思わない日はないよね。だからこの間の東北関東の大雨の災害⁹⁾だって、ああ私伊勢湾台風¹⁰⁾にあったんだわあ、あのときもあんなだったなあって思ってさあ。だから、自分の人生でいつ何が起きるかわかんないってことだよ。それはみーんな、生きてる証拠なんだよ。

(2015年9月13日 聴き取り)

9) 東北関東の大雨の災害

平成27(2015)年9月9日から11日にかけて、関東・東北地方で豪雨災害が発生。茨城県常総市鬼怒川・宮城県大崎市渋井川の堤防決壊などの災害も引き起こした。

10) 伊勢湾台風

昭和34(1959)年9月26日、和歌山県潮岬に上陸し、紀伊半島から東海地方を中心に被害を及ぼした超大型の台風。死者・行方不明者は5000人を超え、経済的被害も甚大であった。